

子どもたちの実態



- ・新型コロナウイルスの期間を経て、人との関わり合いや自分の考えを表現することをなかなか身につけられてこなかった子たちが多い
- ・失敗したくない子が多い。怖い・心配・わからないことや困ったことを言えず、SOSを出せない。
- ・今、『多様性』を受け入れることを大切にしているけれど、いろいろ気をつけて窮屈でもある。『いい人』でいようとすると息苦しい。

対話の大切さ

※『対話』とは、気をつけて自分の感じたことや意見を言わないのではなく、自分も感じたことを言い、相手も感じたことを言い、違いを知ったうえで、自分たちのベストを見つけ出すこと。第3の意見を創り出すこと。



これこそが私たちのつくる
「表現コミュニケーション教育」
プログラムです

軽井沢の全小5 表現力養う授業

仲間の考えを知る大切さ



5人で協力して「キャンプファイヤー」の一コマを表現する軽井沢中部小の児童たち

町単独事業 地元人材活用 対象学年拡大へ

軽井沢町は本年度、町立の全5小学校で児童の表現力や創作力を養う目的の「表現コミュニケーション授業」を始めた。遊びや演劇の要素を取り入れた最初の授業が7月に各校で行われ、児童たちは友だちと協力して課題に挑戦したり、笑顔で体育館を走り回ったり、生き生きとした表情をみせた。

昨年度は、軽井沢東部小が県と県教育委員会による事業「アートの手法を活用した学び」に採択され、表現力を磨く授業に取り組んだ。町では「仲間の考えを知ったり自分を表現したりすることは大切。地元の人材（指導者）を生かすこともできる」（町教委子ども教育課）と、本年度は町単独事業として3小学校に拡大。授業は町内の企画会社に委託し、1年目は各校の5年生を対象に実施する。

22日に軽井沢中部小で行われた授業は、俳優で演劇教育ファシリテーターの中沢聖子さん（46＝御代田町）ら5人の講師が指導。じゃんけんで負けた児童だけが次の順番に進むことができる遊びや、5、6人のグループで協力して

「お題」に合った写真の構図をつくる課題などに取り組んだ。講師が「体育館の床がマグマになった」と声をかけると、友だちをおんぶしたり、窓枠に逃げたり。床に寝転がった男子児童は「居場所の気分を分けて周りを愛せた」。

2時間分の計90分間を確保したため、「授業の中で子どもたちが自分自身に関心を持っていることができる」と中沢さん。

3組の土屋紗英さん（10）は「みんなの意見を尊重して、いろんなことを想像しながら課題ができた」と話していた。

授業は本年度、計4回行う計画。町は来年度以降、対象学年を増やし、軽井沢中学校でも実施することも検討している。

軽井沢高生 伝え方向上

コミュニケーション能力磨く授業



軽井沢高校（軽井沢町）で7日、県と県教育委員会が推進する「アートの手法を活用した学び」の授業があった。演劇などの手法を通じてコミュニケーション能力や表現力を育む狙いで、1年生の約50人が参加。最初は硬かった表情は時間とともに緩み、教室に生徒の笑い声が響いた。

3グループに分かれ、東信2人で協力して割り箸を落とさないように歩く軽井沢高校の生徒たち

県は2022年から参加希望校を募り、高校での実施は軽井沢高校が初めて。同校では1月中旬に計3回の授業を行う予定だ。同校の佐藤真平教諭（41）は「生徒の表情がみるみる変わった。教員側も指導方法を学んで実践できるようにしたい」と話した。

シリテーターら3人が進行役を務めた。2人一組で割り箸を人さし指で支え合って歩く課題では、悪戦苦闘するグループもあれば、すいすいと進むグループも。川田亜依さん（16）は「話したことがなかった人のことも知ることができた。発見が多かった」と笑顔で話していた。